

〈研究ノート〉

高コスト化する専門職の資格取得をめぐる*

——一級建築士受験の「自分史的」エスノグラフィー——

松 村 淳**

1 はじめに一問題の所在

1-1 専門職と資格

数年前のことだが、テレビをつければ頻繁に資格取得のための通信教育や専門学校のコマーシャルが流れていた時期があった。現在は往時ほどの勢いは無くなっているが、雑誌や新聞あるいはウェブサイトの広告欄には必ず何がしかの資格に関する情報が掲載されている。それでも人々の資格取得をしたいという思いは小さくなってはいなさそう。職業における専門性や、その指標となる資格は流動性が高まっている現代社会にあって一つの大きな「よりどころ」となっていることは否定できない。

本田由紀は個人が身に着ける専門性について「ハイパー・メリトクラシーがつきつけてくる、容赦なくかつ捉えどころのない「ポスト近代型能力」の要請に対抗するための有効な「鎧」となる」(本田 2005: 261)と述べ、その重要性を主張する¹⁾。しかし、その主張を真に受けることは少々危険な面があることは、本稿を通読されると実感することができるだろう。言うまでもなく、専門性を身に着けることは悪いことではない。しかし、多くの職業において、特定の分野の専門性

を身に着けたことの指標として資格が要求される。そして、その取得のために多大な、金銭的・時間的コストが必要とされるのである。

本稿で照準するのは建築士という資格である。専門性の高い資格であり、一般にはあまり馴染みのないものであろう。しかし、日本には100万人を超える建築士²⁾がいることから考えても、その規模的なインパクトは決して小さくない。

とりわけ、難関で知られる一級建築士は取得がかなり難しい。平成22年度の合格率は学科試験が15.1%、設計製図試験が41.8%、最終合格率が10.3%であった。資格取得を志すほとんどの者が資格学校に通う。彼らは100万円近い学費³⁾(一回で合格しなければさらに高額になる)をローンを組んで支払い、実務をこなしながら、休日は朝から晩まで試験対策に追われている。

本稿における問いの中心は、専門職と資格の関係である。医師や看護師などの医療関係の専門職や、弁護士、公認会計士などの高度専門職の場合においては資格が専門職スキルを有していることの重要な指標となっていることは明らかだ。

しかし、本稿でとりあげる建築士の場合はどうか。資格を持っていなくても施主の要望を汲み取って、建築基準法を満たした住宅の図面を引ける者は少なくない。

*キーワード：専門職、資格、資格取得のコスト

**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

1) 阿部真大はこのような本田の主張に対し、専門性という「鎧」の必要性は認めつつも、「時にその専門性が労働者の足をひっぱってしまう場合もあることに注意」(阿部 2008: 282)しなければならない必要性を強く訴える。阿部がこのように述べる理由として、専門性は多大なコストと労力をつぎ込んで身に着けるものであり、仕事が終わらなくなったからといって、簡単に捨てたり、代えたりできるようなものではないという専門性の持つ性質を提示している。阿部が照準している職業はケアワーカーであるが、彼の指摘は本稿で照準している建築士という資格にも当てはまる。

2) 平成23年現在、一級建築士の数は約34万人、二級建築士は約70万3千人である。

3) もちろん、「一発」で合格しなければ翌年も学費を払い続けることになる。

建築士の免許を得るには、学歴と実務経験が必要である。ゆえに受験資格を有する者の多くはそれなりに建築の知識と経験を積んできている。特に受験資格の厳しい一級建築士の場合はそうだ。一級建築士の試験は30年くらい前までは、建築業界において「常識的」であると思われることが分かっていれば比較的簡単に合格する試験であった⁴⁾。建築業界という巨大な労働人口を抱える業界において一級建築士という資格は最高峰の資格である。ゆえに、その資格を欲しがることが多くなるのも必然である。資格人口の大きさから、そこに商機を見出した資格学校が建築士の受験対策を始める。そこで勉強をしたものが合格するようになると、多くの受講生が追随するようになる。そうすると試験を実施する側は「資格学校対策」を講じる。つまり問題を難しくする。そうするとますます資格学校へ通わなければ合格できなくなる。そのようなメカニズムによって、建築士試験の問題は難化を続け、資格学校に通わなければ合格できない現状が生まれたと考えられる。

1-2 本稿の目的

現在、建築の専門性と資格は不可分の関係にある。しかし、建築士の資格を持っていなくても高度な建築スキルを身に付けている者も存在する。

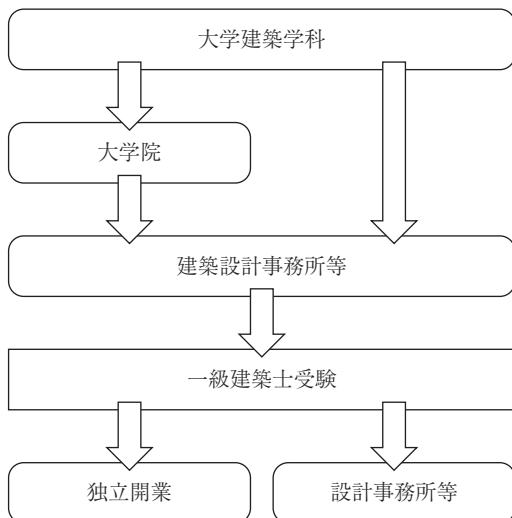


図1 建築士のキャリアパスの一例

かつてはそうだったように、建築士という資格は一定レベルの建築のスキルを身に付けたという一面的な指標に過ぎないはずだ。先述したとおり、学校（大学）での勉強や仕事における実務を通して身に着けた専門性を「認定」する形で資格は与えられた。しかしながら現在はそうはなっていない。

本稿の目的は本来、専門性を身に付けたことの指標であるはずの資格が、「一人歩き」し、それ取得することが建築設計従事者の初期キャリアにおいて大きな目標となっておりと同時に、その取得のために高いコストを支払うことを求められる「巨大な壁」となって横たわっている事を、筆者自身の五年間に渡る資格学校における体験的記述を基に描き出していくことである。

2 一級建築士を目指す

2-1 まずは二級建築士から一資格学校へ入学

筆者は1998年に本学社会学部を卒業した。その後1999年に京都にある通信制の芸術大学に入学し2004年に卒業した。卒業間近のある授業で、大学と提携している大手建築資格学校（N学院）の入学ガイダンスが行われた。現在の建築士法では、建築学科を卒業するとその年に二級建築士を受けることが出来る。しかし、一級建築士の受験資格を得るためには大学卒業後さらに二年間の実務経験が必要であった。実務経験は筆者の父親が設計事務所を営んでいるのでそこに籍を置き、そこを中心に設計活動することによってその要件を満たした。

資格学校が勧めていたコースは一級建築士合格を目標とした三年間のカリキュラムであった。このタイプの学科に入学すると無料で二級建築士講座が付いてくるといふ。3月に卒業し、早速4月から資格学校に入学し、7月の二級建築士の学科試験を受け、それに合格すれば9月に実施される設計製図の実技試験へと進むというコースである。

問題は学費だった。3年間の通学プランで100万年近い学費だ。多くの学生がローンを組んで学

4) 筆者の父親（1970年代に一級建築士取得）の話から。

費を支払う。筆者もローンを組むことにした。営業の社員が慣れた手つきで月々の支払いをはじき出していく。頭金を少し入れることによって月々の支払いは15900円の42回払いとなった。金利だけで10万円近い額である。もっとも、受講生が「なんとかなる」と思わせるような月々の支払い金額に設定するのも営業社員の常套手段であろう。そして筆者も、月々15000円程度ならば、「なんとかなる」と思った。その場で契約書に印鑑を押し、4月からその学校へ入学することに決めた。

入学が決定すると一人一人に担当がつくようになる。担当は長丁場となる試験勉強のペースメーカーとなったり、時には叱咤激励をしてくれたり、相談に乗ってくれたりする存在である。担当職員は受講生の担当をするだけが仕事ではなく、普段は営業の仕事をしている。筆者の担当になったのはK氏という40代後半と思しき男性であった。彼は、本業の営業が忙しいのかあまり連絡をよこさなかった。当初は欠席すると彼から電話連絡があったが、しだいにそれもなくなっていった。

2-2 資格学校の厳しさに直面

初回のガイダンスで「絶対に合格する」といった決意表明を一筆入れた誓約書を書かされる。内容は合格を目指してとにかく学習に専念するという、きわめて常識的なものだ。毎回の講義への出欠はタイムカードで厳格に管理され、遅刻すると「叱責」を受ける。欠席すると携帯電話に電話がかかり理由を問われる。多くの者が働きながら資格を取りに来ている。「勉強」から遠ざかって久しい者が多いゆえ、学校の職員は受講生に学習意欲を強く動機付けることも大きな仕事である。

壁には「出席することは合格へ一歩前進」「欠席することは合格から一〇歩後退」「予習、復習なくして合格の道なし！」などと朱色で受験生を啓発する文言が書かれた標語があちらこちらに貼付されている。

また、教室の真正面の上段には「スパルタ教訓」と題した校訓が書かれた額が掲示されている。そこには「一、厳しさを恐れない」、「一、根

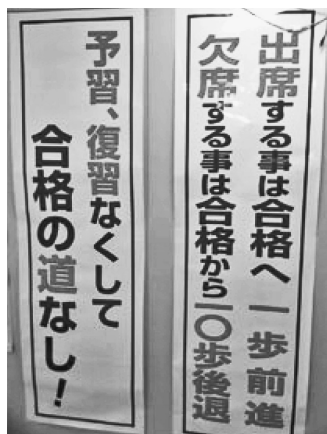


図2 教室の壁に貼られたスローガン



図3⁵⁾ 教室の前方

性を持つ」、「一、人を頼らない」、「一、全員合格」と書かれている。その隣には「教室禁止事項」が書かれた額が掲示されている。「遅刻、欠席、早退」「宿題未提出者の入室」「教室内での飲食喫煙携帯電話の使用」「講義中の居眠り、無駄話、録音」「クラスの和を乱す行為」などが書かれている。

授業の最初には教室長が教壇に立ち、大きな声で「全員起立」という号令をかける。受講生はそれに従い一斉にパイプ椅子から立ち上がる。「気を付け」の姿勢をし、講師の「礼、お願いします」の声に合わせて「お願いします」と唱和する。野太い大人たちの声が教室に響き渡り、「着席」の号令で着席する。授業は最大で100人程度入る大教室で行われる。中身はDVDによる映像講義である⁶⁾。そこでは居眠りや飲食などは徹底

5) 出典 <http://teratlsky2.seesaa.net/article/123912452.html>

的に取り締まられる。水筒を机上に置くことも禁止だ。皆、真剣な受講態度を義務付けられる。二級建築士の学科コースに来ている学生は、建設現場で肉体労働をしている風体の若者が多かった。彼らは仕事終わりに、各々の作業着のまま講義を受けに来ていた。疲れて居眠りをする受講生も少なくなかった。彼らは巡回に来た職員に肩を揺すられ起こされていた。居眠りは徹底して「取り締まられる。」居眠りをする学生は高額な金額で購入した学習機会を自ら放棄しているので、まったくの自己責任なのであるが、学校としては規律を重視し「だらけた」雰囲気蔓延することを恐れていたようだ。

2-3 二級の学科試験をクリア、そして設計製図へ

2-3-1 手描きの難しさ

やがて7月になり、学科試験本番を迎えた。二級建築士の試験は学科Ⅰ（建築計画）、学科Ⅱ（建築法規）、学科Ⅲ（建築構造）、学科Ⅳ（建築施工）となっている。建築士の試験では数学や物理の知識が必要なのではないかと聞かれることも多いが、基本的には四則演算が出来れば対応できる。複雑な公式もあるが、それは公式として意味を覚えてしまえばよい。法規の試験では建築基準法が記載された法令集が持ち込み可能である。『基本建築基準関係法令集』（以下法令集と呼ぶ）という名称で何種類か出版されているが、筆者はN学院が推奨する法令集を用いた。総ページ数

2160ページ、厚さが7cmにもなる。レンガ色の表紙がまさにレンガそのものを連想させる。持ち込みが可能であるため、この本に施せる細工は限られている。傍線を引くことと、簡単な書き込み、そしてインデックスシールを貼ることである。2000ページに及ぶ法令集のすべてが試験に出るわけではない。おおよそ出るところは限られているので、その条文に赤鉛筆で線を引いていく。さらに条文が記載されているページにインデックスを貼っていく。その作業は重要だが、大変に骨の折れる作業である。

一級建築士の合格が最終目標である筆者にとって、通過点に過ぎない二級建築士の学科の問題は易しく、難なく回答を終え無事に合格することができた。

合格発表から間もなく、製図の授業が始まった。製図の授業は10人ほどを一つのグループにし、一人の講師が担当するという形であった。講師は皆現役の建築士であり、日曜日（水曜日コースもある）の休日を利用して学校に教えにきている。多くはN学院の出身者であった。リーダー格の講師が全体を統括していた。彼は赤ら顔の五十がらみの男性で、体と声が大きい。「たたき上げの工務店のオヤジ」といった風情だ。

筆者のグループの講師はYさんという40代くらいの柔和な雰囲気の男性であった。合格発表から設計製図の試験までわずか二カ月である。その間に、筆者のような「手描きの図面」を一度も描いたことの無い者を合格するレベルにまで引き上げるという。これがいかに困難なことであるかをリーダー格の講師は語っていたが、同時に、二か月後にはそのような学生もなんとか、描けるようになるのだということも語った。二級建築士の試験の課題は通常、一戸建ての木造住宅の設計である。通常というのは、数年に一度鉄筋コンクリート造（以下RC造）の課題が出ることもあるからだ。

4時間半の時間で、与えられた課題に即した住宅を設計し、要求図面を描いていく。私が受験した時に要求された図面は、配置図兼一階平面図、



図4 インデックスを貼り終えた法令集

- 6) かつては講師によるライブ授業だったようだが、講師の質が均一ではないため教室間で合格率に差があったようだ。それを解消するために全国画一の映像講義を東京から配信している。

二階平面図、矩計（かなばかり）図、梁伏図、立面図そして面積表であった。これだけの量の製図を4時間半でやることは通常の業務では有り得ないことである。

2-3-2 実力の差を見せつけられる

ゆえに講義では、木造住宅が出題されることを前提として進められていく。最初はまず、線の引き方からだ。垂直線は「上から下」に引くものだと勝手に思っていたのだが、「下から上」に引くものであると教わった。下から上に垂直線を引くことに慣れていないので、身体が思うように動かない。身体に新しい動きを習熟させることの困難さを思い知った。とにかく時間が限られているので、基礎的な訓練は最初の数時間のみで、どんどんと実践的な内容へと入っていく。筆者の隣席の受講生はおそらく20代前半くらい、明るい茶色に染めた長めの髪、「腰パン」履きしたジーンズとタンクトップという出で立ちだ。タンクトップからは現場で鍛えられたであろう日に焼けた筋肉が盛り上がった腕がむき出しになっている。筆者は、彼がその外見に反して極めて繊細で見事な線を引いていくのに見とれていた。速く、そして正確だ。筆者は知人の建築士に借りてきた平行定規に、A2版の用紙をセットしながら、始まってもしないのにすでに自信を失いかけていた。

彼に話を聞いた。20代前半の彼は工業高校出身で手描きの図面を描いた経験が相当あるという。改めて教室を見渡すと、筆者のような「素人」は少なく、皆現場でたたき上げたような経験者が多いように見えた。彼は「慣れっすよ」と答え、自分の作業に戻った。取り立てて上達の秘訣など無い、ただ「慣れ」があるだけだ。それはあまりにもシンプルな答えだった。そうだとすれば、限られた時間の中で練習「枚数」を稼ぐことが合格への唯一の道だということだと理解した。当初はどうなることかと思ったが、彼の言葉通り、慣れてくると時間内で描けるようになってきた。しかし、次なるハードルが待ちかまえてい

た。それは図面の「見栄え」だ。

皆が描いた図面を教室の壁に貼り、講師が良く描けている図面に講評を加えていく。高評価の図面はたしかに図面にメリハリがある。断面線は太く、見えがかりの線は細めに描く。線にメリハリをつけることによって、図面に表現力が生まれてくることを知った。また図面に書き込む数字や文字も重要であった。図面に記載される文字は独特の形状をしている。それは、建築士である父の書く文字や数字と同じ形状であった。父は筆者が書く文字を「文系の字や」などと揶揄していたが、なんとなく意味が分かった。文字や数字も重要な記号であるのだ。図面は設計者と施工者を結ぶコミュニケーションツールである。設計者に代わって簡潔にそして的確に意図を伝えるためのツールなのである。それ以来、少しずつ文字や数字の練習もするようになった。

2-3-3 実力不十分、そして本番へ

しかし、本番では「お手本」があるわけではない。出題された条件をすべて満たすように、自分でプランを考えていかなければならない。そのプランを考えていくことをエスキスと呼ぶ。本番ではまず、エスキス用紙を使って1/400程度の縮尺でプランを練っていく。

この作業が最も重要である。できるだけ完全なプランを作り、すべて頭の中に入れておくことが望ましいとされる。実際、エスキス用紙を見ずに図面を描きあげる者もいた。しかし、多くの受講生にとってそれは難しく、たいいていエスキス用紙と首っ引きになりながら、図面を作成するのだ。

本番で出題されるのは「近隣の街並みに配慮した車庫付三世帯住宅」という課題⁷⁾だ。構造は木造で、階数は2である。延べ面積は180~220m²。要求される図面は、一階平面図兼配置図、二階平面図、二階床伏図兼一階小屋伏図、立面図、(以上全て1/100)そして矩計図(1/20)と面積表である。課題のタイトルは事前に知らされているものの、条件が変われば、幾通りも解答が考

7) 平成18年から平成22までの出題課題は以下の通り。平成18年「地域に開かれた絵本作家の記念館」〔鉄筋コンクリート造(ラーメン構造)2階建〕平成19年「住宅地に建つ喫茶店併用住宅」(木造2階建)平成20年「高齢者の集う趣味(絵手紙)室のある二世帯住宅」(木造2階建)平成21年「商店街に建つ陶芸作家のための工房のある店舗併用住宅」〔鉄筋コンクリート造(ラーメン構造)3階建〕平成22年「兄弟の二世帯と母が暮らす専用住宅」(木造2階建)

えられる。

学校では、考えられる様々なパターンの「近隣の街並みに配慮した車庫付三世帯住宅」の図面を作成した。しかし、製図力がついていかず、時間内に完成させることが難しい状態だった。そしてそのような状態のまま本番を迎えた。やはり結果は惨憺たるものだった。図面を描き上げることで以前に、プランがきれいにまとまらなかった。エスキスの時点で納得のいく間取りが作成できないまま、「見切り発車」で本番用の用紙に向かい製図を開始した。結果は明らかだった。エスキスを「見切り発車」して本番で満足した図面を描けるようなことは絶対にない。まず、エスキスの段階で、しっかりプランを詰めておかないと、本番ではプランを考える時間など皆無だ。二年目の課題は製図力のアップに加えて、エスキス力をさらに磨いていく必要がありそうだった。

2-4 二級建築士製図二年目

二級建築士の製図に再チャレンジする年度が始まった。本講義が開講されるのは7月だ。それまでの時間は、コツコツと自宅で「自主練」をしていた。

やがて本講義がはじまり、財団法人建築技術普及センターからその年の課題が発表された。その年（平成18年度）の課題は「地域に開かれた絵本作家の記念館」であり、構造は木造ではなくRC造のラーメン構造であった。これは木造の図面を描くのが苦手な筆者には朗報だった。RC造のラーメン構造は、コンクリートの柱と梁から構成されるシンプルな構造である。ゆえに、複雑な矩計図などに煩わされることがない。ある程度、製図力が付いた二年目にRC造の課題に当たったのは運が良かった。想像通りRC造の図面は木造の図面に手を焼いていた頃に比べると格段に易しかった。筆者は順調に学校の課題をクリアし、自信をつけていった。

本番では「エントランスが二か所」という、若干奇をてらった要件があったが、落ち着いてエスキスをまとめ上げた。そこからは普段通りに図面を仕上げ、時間内に完成させることができた。毎年12月1日に合格発表がある。筆者は無事に合格することができた。その年の設計製図受験者

16934人、合格者は9451人であり合格率は55.8%であった。

3 一級建築士への挑戦

3-1 二級との違いを痛感した一年目

無事に二級建築士に合格したのち、さっそく翌年の年明け早々に一級建築士のクラスがはじまった。また学科からのスタートだ。一級建築士のクラスに集まっている受講生の面々は二級の受講生比べて随分と雰囲気異なっていた。二級のクラスが「現場」の人間が多かったのに対して、一級のクラスは設計業務に従事している雰囲気の者が多かった。

「一級は難しい。」何度聞いたかわからない言葉を、通い始めてからもやはり何度も聞かされた。聞かされなくてもテキストを見れば分かる。科目は二級と同様、学科Ⅰ（建築計画）、学科Ⅱ（建築法規）、学科Ⅲ（建築構造）、学科Ⅳ（建築施工）の四科目（現在は五科目）である。しかし、二級とは比較にならないほど難しくまた量も多い。1月の半ばから、毎週日曜日の朝9時から昼過ぎまでカリキュラムが組まれている。一度にテキストを数十ページ進むのでついていくのが大変であった。授業の終わりには確認テストが課せられ、一定以上の点数が取れないと再テストを課せられるのである。本番までに何度か模擬試験があったが、そのどれも思うような点数が取れなかった。

とにかく覚える量が膨大で、なんとか形だけついていく有様だった。そうして、手ごたえのないまま、やがて7月26日になり、一級建築士学科本試験の日を迎えた。午前9時に会場となるR大学に到着した。駅から大学前は受験生の長い列が出来ている。二大資格学校のNとSはそれぞれ大学前にテントを張って、全職員総出で応援合戦を繰り広げている。また学校に通っていない独学組に対して、設計製図から入学してくれるように営業活動をしている。筆者は自分の担当職員に会ったので、ウェットティッシュと直前対策冊子が入ったビニール袋を受け取り会場に向かった。

9時半から学科試験の開始である。午前中は計画と構造である。二科目合わせて3時間であり、

一科目につき 25 問の五択問題である。思わしくない出来のまま、時間切れになり、昼食休憩に入った。知り合いを一人も見えなかったのも一人で学内のベンチに座り総菜パンを口にしていると、四方八方から午前の部の答えを確認し合う声が響いてくる。構造は計算が壊滅状態だったので、このままでは足切り⁸⁾に引っかかるなと思いつつも、午後で挽回しようと気を取り直して、教室に戻った。昼食休憩を挟んで午後は法規と施工の試験である。試験が始まるとまず、試験監督が順番に、受験生の法令集を念入りにチェックしていく。もし過剰な書き込み等が見つかったら、その場で没収されてしまう。一問ずつ法令集を照合しながら問題を解くので、法規の試験は法令集が無いと絶対に解答できない。ゆえに没収されることは不合格を意味する。幸い誰も没収される受験生は出なかった。結局午後の試験も振るわないまま筆者は会場を去った。帰り道で渡される正解番号をもとに、自己採点を済ませ、それを報告するために三宮の資格学校へ戻った。正確な得点は覚えていないが、おそらく 40 点くらいであったと思う。当時の合格最低点は計画・法規・構造・施工の各教科 12 点以上が必要で、総合点 63 点以上であった。ここで合格していれば、早速設計製図の試験対策に入るわけであるが、もう一年じっくりと学科対策をすることになった。

3-2 「つかめてきた」二年目

気を取り直して、二年目の学科の学習に入った。筆者は、なんとしても次年度（平成 20 年度）までに学科試験をパスしておきたかった。なぜなら試験の制度が 2009 年度から変更され 5 科目になることが決定したのだからだ。5 択が 4 択になるとはいえ、1 科目増えるのは相当な負担である。それはどうしても避けたかった。2 年目に入ると勉強の「勘所」が分かるようになってきた。時間をかけるべきところとそうではないところの峻別が出来るようになり、前年度よりも効率的に学習を進めることが出来た。そうして平成 20 年になり、また 1 月半ばから 7 月まで実施される

本講座が始まった。基本的に、去年一度こなしている問題ばかりである。幾分余裕をもって学習を進めた。しかし、模擬試験ではあまり思わしくない成績をとったりもしていたので、合格か不合格かどちらに転ぶかは当日の問題次第だと思われた。前日は朝の 9 時から午後 7 時まで図書館で最後の確認をし、帰宅後にもすこし勉強して午前 1 時に就寝した。

平成 20 年 7 月 27 日の試験当日を迎えた。朝 7 時に起床し、諸々の準備を済ませ家を出た。二級建築士の頃から、通算 4 度目の R 大学だ。受験会場は失敗した前回と同じ教室だ。1 時間目は計画と法規だ。昨年あまりきちんとチェックされなかったのも、いろいろと書き残したまま試験に臨んだ。試験開始後に、試験監督が回ってきて、一人ひとり法令集をチェックしていく。今年は昨年と比較すると、じっくり見ているな、それでもまあ大丈夫だろうとタカをくくって順番を待っていた。筆者の横にやってきた試験官がおもむろに筆者の法令集を取り上げ、検分し始めた。試験監督のほうは気にせずに問題に集中しようとする。しかし、なかなか法令集がかえってこない。消し忘れたところがあったのかと、不安がつのってきた。没収されると、その瞬間、この試験は終わりで。だんだん心臓の拍動が激しくなってくる。手のひらはじっとりと汗ばんでいる。筆者はたまにかねて試験官に尋ねた。「何か問題でもありましたか?」「うーん、これちょっとまずいので消してくれる?」

そこには純粹に消し忘れた図があった。筆者は書いた事すら忘れていたが急いでそれを消して、事なきを得た。新傾向の問題は割り切って飛ばし、できる問題に注力した。かなりの手ごたえを感じて前半戦を終えることができた。試験監督が退出し昼食休憩に入った。構内にあるコンビニエンスストアが混んでいたのも、最寄り駅まで戻った。スーパーで惣菜弁当を買って、その場で食べた。しばらく一人で時間を潰し、再び猛暑の中を歩いて会場へ戻った。会場に着いたら、すでに試験開始の 10 分前だった。ギリギリまで施工の復

8) すべての科目に基準点が設けられており、一科目でもそれを下回ると総得点で合格点を上回っていても失格となる。通常 11 点から 15 点程度である。

習と、構造計算の公式を暗記していたら後半科目の開始時間となった。まずは構造からだ。難関の構造力学の計算問題が6問あった。内3問は直前にやっておいた問題だった。「断面二次モーメント」、「全塑性モーメント」「静定構造物」しっかりやっておいた問題だ、解答に手ごたえがあった。しかし、後半は、筆者のあやふやな知識を無情にも突いて来る問題の連発であった。その年は「アンカーボルトを打つ位置」「壁率比」など実務で使うような知識が多く出題されていた。施工も同様だった。かなり実務を意識した試験になっていた。途中からバタバタと退席者が目立ち始めた。私は最後の最後まで粘って問題を解いた。

自己採点の結果は計画 21 点、法規 19 点、構造 19 点、施工 18 点、合計 77 点であった。合格最低点は例年 63 点前後ということを考えると、これでようやく学科試験をパスできたことはほぼ確実と思われた。その年度、全国 59 会場で実施された試験の実受験者数は 48651 人、合格者数 7364 人、合格率は 15.1% であった。その中には筆者も含まれていた。

さて、ここからがいよいよ建築士試験のクライマックスであり、最終関門である。二級建築士学科試験対策から始まった、筆者の一級建築士受験の長い旅路は最終関門へと差し掛かった。憧れでもあった一級建築士の設計製図のクラスへと入門できるのだ。それを思っただけで筆者はささやかな昂揚感に包まれた。

4 一級建築士の設計製図問題をどう解くのか

4-1 設計製図問題の概要

一級建築士の設計製図の体験を記述する前に、ここで一級建築士の設計製図の問題の概要と解答のプロセスを紹介しておきたい。本番では A3 の問題用紙とエスキス用の方眼紙、そして提出用の用紙の三枚の用紙が配布される。配布物はそれだけである。一級建築士の製図試験はまず問題を

熟読するところから始まる。A3 の紙にびっしりと要求条件が書かれている。用紙の一番上にはその年の課題のタイトルが書かれており、大きく I. 設計条件と II. 要求図面等という記述に分かれている。

まずは設計条件からみていこう。まず、この建物がどういう機能を持つ建物で、何を目的にしているのかなどについて記載されている。次に、この建物で特に配慮すべき点が述べられる⁹⁾。敷地条件に関しては箇条書きの説明のほかに 1/2000 の周辺敷地図が与えられ、周辺状況が確認できるようになっている。つづけて建築物の概要が説明される。平成 20 年度の課題では「ラーメン構造による鉄筋コンクリート造とし、一部、他の構造種別と併用してもよい。」とされ、さらに「地下一階、地上七階建ての一棟の建築物とし、地下 1 階を除く床面積の合計は、6000 m² 以下。」という条件が記述されている。それに加えて特記事項があればここに記入される。平成 20 年度の試験ではエスカレーターを設置することが求められていたので、エスカレーターの概略図が与えられていた。また、その他の施設として駐車場や駐輪場の必要台数などが記載される。用紙の左半分にはここまでが記載されている。

次は所要室である。どのような部屋が、どのような大きさで、どこにいくつ必要なのかが記載されている。ここが最も重要な個所であり、読み落としは即失格につながる。以上が I の設計条件である。用紙の右下 1/4 程度のスペースに II. 要求図面等についての記述がある。ここでは必要な図面とその縮尺が書かれている。平成 20 年度試験では、1 階平面図兼配置図、2 階平面図、基準階平面図、そして断面図である。縮尺はいずれの図面もすべて 1/200 である。そして最後に計画の要点について記述すべき内容が記載されている。

4-2 解答のプロセス

問題用紙を渡されると、まず蛍光ペンで要点をハイライトしていく。とにかくじっくりと時間を

9) 例えば平成 20 年の試験では①ホテル部門、フィットネス部門及び共用部門の異なる機能を適切にゾーニングした計画とするともに、高齢者、障害者等の利用に配慮した計画とする。②1 階及び 2 階のエントランスホールは、2 階でベデストリアンデッキと、一階で歩道とそれぞれ接続し、エントランスホールに設けるエスカレーター及びエレベーターを利用して、常時、自由に通り抜けができる計画。③建築物全体が構造耐力上、安全であるように計画。④建築物の環境負荷低減に配慮した計画。となっている。

かけて読み込む。しっかりと問題文を頭に入れたら次は、二級建築士の時と同様、エスキスと呼ばれる作業に入る。本番の図面は 1/200 であるがエスキスは通常 1/400 で描いていく。エスキスで敷地内における建物の配置、部屋の配置、同線の検討などを綿密に行う。特に注意すべきなのは、建築基準法施行令第 120 条に規定されている直通階段に至る歩行距離¹⁰⁾、また同 121 条 3 項に規定されている 2 以上の直通階段を設ける時に留意すべき「重複距離」というものに特に注意する必要がある¹¹⁾。規定に反すると則失格である。この作業には最低でも二時間はかかる。エスキス段階でしっかりと設計をしておく必要があるのだ。エスキスに時間を使いすぎると本番の図面を描く時間が無くなる。しかし、エスキスで「見切り発車」をすると、絶対に失敗する。それは先述したとおりだ。本番は、エスキスでまとめたプランを「清書」とするというイメージに近い。エスキスが完璧にまともだと、「流れるように」図面が描ける。全体像が頭に入っているゆえ、この線を引いたら、次はこれ、この線とあの線は同時に引こう、などと全く手が止まらない。しかし、エスキスが不十分だと、いちいち手が止まってしまう。その時間が積もっていくと大幅な時間ロスとなることは言うまでもない。

4-3 製図の勉強を開始

4-3-1 選ばれし者たち

資格学校内でも一級建築士設計製図組は、少し格の違う扱いを受けていた。少々遅刻は見逃されたりもしたし、机上にペットボトルを置いていても特に注意を受けたりすることもなくなった。一級建築士の設計製図は二級建築士をはるかに超

える難易度である。対象となる建物は、6000 m² クラスの規模であり、なおかつ複数の機能を持つ複合施設が出題される。たとえば、筆者が受験した平成 20 年はビジネスホテルとフィットネスクラブからなる複合施設であった¹²⁾。

5 時間半の試験時間内で問題を読み解き、要求図面をすべて完成させることは二級をはるかに超える難易度である。9 月の合格発表を待ってから試験勉強を開始すると明らかに練習時間が足りなくなる。ゆえに自己採点をして「受かっていると思われる」者は製図の授業に参加することになっている。もしも学科が不合格なら受講料が返金される仕組みだ。初回の授業では二級建築士の時と同様、ほとんど素人が二か月弱で 6000 m² 規模の建物の設計を 5 時間半で設計することがどれほど大変かということが講師の口から述べられ、一瞬で受講生一同を絶望の淵に追いやった。しかし、これまで素人に近いレベルの受講生でも、決められたことをきっちりこなしていけば必ず合格できるということが伝えられ、ほんの少しだけ、教室に安堵の色が広がる。「君たちはもう手を伸ばせば一級建築士が居るところにいる。」何度もこの言葉を聞かされたが、「あと一回試験にパスすれば一級建築士になれる」と思うとシャープペンシルを握る手にも力が入った。

4-3-2 一級建築士製図コース

製図コースは毎週日曜日の朝 8 時半に集合し、9 時から授業が始まる。初回から数回は、基本的なことを学ぶが、とにかく時間が限られているので、すべて実践の中で覚えていく形をとっていた。9 月に入ると、午前 9 時から午後 2 時半まで通しで製図を描き上げる。それから昼食をとり、講評会が行われる。講評会のスタイルは二級建築

10) 建物の種類と規模によって、直通階段に至る歩行距離が規定されている。おおむね 30 m から 50 m である。

11) 建築基準法施行令第 120 条第 3 項の規定より。第 1 項の規定により避難階又は地上に通ずる 2 以上の直通階段を設ける場合において、居室の各部分から各直通階段に至る通常の歩行経路のすべてに共通の重複区間があるときにおける当該重複区間の長さは、前条に規定する歩行距離の数値の 1/2 をこえてはならない。ただし、居室の各部分から、当該重複区間を経由しないで、避難上有効なバルコニー、屋外通路その他これらに類するものに避難することができる場合は、この限りでない。

12) 平成 12 年から平成 20 年までの課題は以下の通り。平成 12 年「世代間の交流ができるコミュニティセンター」、平成 13 年「集合住宅と店舗、からなる複合施設」平成 14 年「屋内プールのあるコミュニティ施設」平成 15 年「保育所のある複合施設」平成 16 年「宿泊機能のある「ものづくり」体験施設」平成 17 年「防災学習のできるコミュニティ施設」平成 18 年「市街地に建つ診療所等のある集合住宅」平成 19 年「子育て支援施設のあるコミュニティセンター」平成 20 年「ビジネスホテルとフィットネスクラブからなる複合施設」。

士の時と同様、壁に受講生の作成した製図を貼付し、講師がコメントを加えていくというスタイルだ。時にはグループ学習も行われ、お互いの図面を見せ合いながら議論したりする。皆一級建築士でそないものの、建築実務に長けた者たちである。彼らとの議論を通して学ぶことは少なくなかった。

10月に入ると、疲れが見え始める。あと少しで本試験だ。ほぼ全ての受講生が働きながらの参加である。本当は体を休めたい休日に朝から晩まで製図と格闘しているのだ。この時期になると肩や腰、そして目が悲鳴を上げ始める。ここから先は体力と精神力の世界である。

4-4 設計製図はじめての本番

4-4-1 会場のセッティングと5時間半の人間関係

試験会場の座席につくと、まず平行定規をセットするところから始まる。たいてい、会場は大学や高校なので一人あたりのスペースは不十分である。小さな学習用の机には平行定規を乗せることはできない。そこで平行定規に角度をもたせるために「マクラ」というものを使う。ボール紙を組み立てた三角柱である。これは試験会場にいけば資格学校の職員が配布をしている。マクラを平行定規の下に敷き、ずれないように念入りに「布製のガムテープ」で留める。「紙製のガムテープ」は跡が残るので使用が禁止されているところが多い。

次に、「製図用具入れ」をセットする。製図用具とは、ブラシや定規、テンプレートなどである。筆者はVHSテープのカバーをガムテープで机の際に留めておき、その中にこれらの道具を入れておいた。

これらをしっかりと固定をすると、今度は前後の受講生に挨拶をしておく。もちろん、そのような決まりがあるわけではない。ではなぜ挨拶をしておくのか。その理由は次のようなものだ。図面の作成は平行定規と大きな三角定規の2種類の定規を主に使用する。三角定規の鋭角の部分が前の座席の人の背中を「刺して」しまうことが頻

発する。あらかじめ、それを断っておくのである。後ろの人に関しても同様に、少しは気を使ってもらえるように「5時間半の人間関係」を作っておく。試験を受けているとあつという間に感じるが、5時間半という時間は決して短くないのだ。彼らへの挨拶からちょっとした談笑へとつながり、それによって張りつめた気持ちを少し解放してやることができた。さらに、当日の服装にも気を使う。私は深い部分までボタンで開閉できるポロシャツの上に、長袖のシャツを羽織っていた。空調が聞いていない部屋も多く、暑さ寒さは衣服の脱着で調整せざるを得ないのだ。下はポケットがたくさんあるカーゴパンツを履いている。ポケットの中には飴玉やカロリーメイト、予備の消しゴムなどを入れている。靴は着脱のしやすいスニーカーを履く。製図が始まると靴と靴下を脱いで裸足になる方が集中できるからだ。当日も、私はエスキスが終わって「清書」がはじまると靴と靴下を脱いで裸足になって図面を描いていた。

4-4-2 想定外の出題

本試験の課題は「ビジネスホテルとフィットネスクラブからなる複合施設」であった。問題は事前に発表されるので、ビジネスホテルやフィットネスクラブを見学したりもした。しかし、問題文を読みながら青ざめた。敷地周辺にあるペデストリアンデッキ¹³⁾からアクセスできるようにするとある。建物の階高との関係で必ず高低差が生まれるのだが、その処理方法を私は知らなかった。これは困ったと思いながら、課題を読み進めていくと、エスカレーターも設置せよという条件があった。エスカレーターは資格学校では一度も図面を描いたことがないので収め方が分からなかった。この二つの未知の要素のおかげで筆者のエスキスは二転三転し、時間を大いに失った。エスキスが失敗すると挽回はほぼ不可能だ。案の定、全てを描き上げることができずに5時間半の持ち時間を使い果たした。一面でも図面の未完成があると即失格である。解答用紙を提出した瞬間、筆者の合格は来年以降に持ち越されることが決定した。

その日の夜、インターネットの掲示板では今回の試験についての感想や講評で溢れていた。筆者

13) 高架状になっている歩行者専用道路

にとっては途方もなく難しいと思われた試験だが、整合性のあるプランにまとめ上げている者も少なくなかった。エスキス力、製図力すべての足りなさを痛感した一年目であった。

5 一級建築士製図二年目

5-1 ラストチャンス

受験資格があるので、もう一度受ける意思是揺らがなかった。しかし、また資格学校に通うには30数万の学費がかかる。当時の筆者は30万円を払えばもう一級建築士は手中に転がり込むと思いついていた。学費ローンの残金に新たに払い込むことになる30万円が加えられ、さらに2年ローンの完済期間が延びた。

平成21年になり2年目の製図の授業が始まった。筆者は気分を変えるために平行定規を新調した。これまで使っていた平行定規は、持ち歩く際、肩に食い込むほど重かったので通学の行き帰りが随分と苦痛だった。しかし、新しい平行定規は軽く、それだけでも随分と気分は軽くなった。筆者はこの年に母校の大学院に入学した。平日の昼間は大学院での授業、夜は塾の講師、そして休日は1日中製図の授業でつぶれた。

2年目のメンバーは去年から引き続いて受ける者が何名か目に付いたが、あとは初めて見る顔が多かった。現在は一度学科試験に合格すれば3回まで製図試験が受けられるが、筆者が学科を合格した年度までは製図のチャンスは2度までだった。ゆえに今回がラストチャンスである。これに失敗するとまた最初から学科試験の受け直しである。しかも今度は5科目である。何としても今年受かっておきたかった。筆者は休日をこの薄暗い校舎の中で一日中過ごすことにすっかり辟易していた。休日の空いている電車に乗り、駅を降りて人気のないオフィス街を抜け学校に向かう。帰りは疲れた体を引きずって、休日を満喫した人々を目いっぱい乗せた電車に乗り込むのだ。筆者はそんな生活に疑問を感じるが多くなっていた。ここまでして、取りたい一級建築士という資格って一体何なんだ。それは筆者をどうにかしてくれるのだろうか。資格をとれば、そこから先はバラ色なのか。その日の課題がうまくいかなかった日

は特にこのような思いにさいなまれながら帰宅の途についた。

5-2 「フリハン」の脅威

一年「先輩」であるので最初の数回は余裕があった。初めて受講する人たちが慣れない手つきで平行定規をセットする横で、さも分かったように手際よくセットするのが小さな快感だった。そんな小さな優越感に浸れたのも、ほんの最初のうっただけだった。

周りの「初心者」たちがどんどん上達していく中、筆者の製図スキルは停滞状態であった。理由はエスキスが上手くまとまらず、時間が足りなくなるといふよくあるものだった。その分、製図のスピードを上げればいいのだが、元来手先が不器用な筆者では限界があった。そんな筆者をしり目に、驚異的なスピードで製図を描く者がいた。彼は「フリハン」と呼ばれる手法を用いていた。「フリハン」とはフリーハンドのこと、つまり定規を一切使わないのだ。設計製図で定規を使わないなんていうことがあり得るのかと思ったが、彼はそれを成し遂げていた。それはもはや「芸」の領域であった。一級建築士の試験は「芸」なのか。図面を早く描ける「特技」の持ち主が合格するのか。この試験の本質がだんだんと分からなくなっていた。講師は自分が現役の頃は最速で何時間で描きあげた、などと武勇伝を語っていたが、速く描くという「技能」がなかなか身につかない筆者は、徐々にクラスに対して疎外感を覚えるようになっていった。

6 資格学校の面々

一級建築士の設計製図クラスには様々な人々がいた。やはり多くが設計の実務をしながら独立開業のために資格を取得しに来ていた。設計事務所、建設会社どこも待遇は厳しい。ある者は今の不本意な待遇から抜け出すために、一級をとって独立したいと切望し、またある者は会社の中での待遇アップのために一級を目指している。結婚したての若いお父さん、子育てがひと段落した中年の主婦、定年間近の建設会社の社員、建築設計事務所に勤めるオシャレな若者。年齢も性別も様々

だった。しかし皆それぞれ現状を変えようと思って、貴重な時間と高い金をつぎ込んでこの場所に来ている。現状が満ち足りている者はおそらくここにはいない。単なるスキルアップのためや、いつのことかわからない「将来」のためにこの資格を取ろうとしている者はいない。一級建築士の資格を取ることで、多かれ少なかれ明らかに未来が変わる。建築実務者にとって一級建築士は喉から手が出るほど欲しい資格なのだ。

束の間の昼食休憩や駅までの帰り道くらいでしか、彼らとプライベートな会話をする時間はなかった。一日中図面と格闘していると人と話をしたくなるのだ。筆者は、帰りは必ず誰かと一緒に駅までの道を歩くことにしていた。

製図クラスの者ではないが、印象に残っている者がいる。彼はもう何年も学科試験に挑戦している五十がらみの男性だ。毛玉だらけの相当薄くなった頭髮は白髪交じりで、いつも黒いフリースジャンパーと、くたびれたジーンズを履いていた。彼は学校内のちょっとした有名人だった。彼とは通っているうちに顔なじみになり、筆者に「松ちゃん、松ちゃん」と愛想よく話しかけてくるようになった。彼は、今仕事はしていないと言っていた。工務店で働いていたが業績不振で解雇されたのだという。そんな彼がどうやって生活費と高額な学費を捻出しているのかは謎のままだった。彼は、一級建築士を取ったら就職活動をしたいと言っていた。しかし、まだ一度も学科試験をパスしたことはないようだった。模擬試験の成績を聞いても芳しくなかった。何年も勉強をした結果がこれなら、この先も合格しないという蓋然性は高いと思われた。

おそらく資格学校もそれはわかっているはずだ。しかし、資格学校の言い分は「今後の頑張り次第」では可能性はゼロではない、だからこれからも応援していく。おそらくこのような内容だろう。さらに言えば、彼は一級建築士は建築業界では「必要」な資格ではあっても「十分」な資格ではないことを理解しているのだろうか。おそらく薄々気づいていたはずである。それでも、建築業界に身を置く無資格者、あるいは二級建築士である人々にとって一級建築士という資格は輝いて見えるのだ。筆者にも輝いて見えた。筆者の父親の

頃は一級建築士を取ると「宴会」をして祝ったなどという話も伝え聞いた。しかし、資格がその後の建築家や建築士人生の安泰を保証してくれるわけではない。無職の彼にとって、一級建築士を目指して学校に通うことそれ自体が彼の人生の「よりどころ」となっていたのだと思う。

7 そして最後の本番

平成 21 年 7 月 27 日、これが最後のチャンスと思って臨んだ試験の当日がやってきた。昨年に比べると製図のスピードも上がり精度も上がっているはずである。

今回の課題は「貸事務所ビル」である。一階部分が自動車販売店、二階以上は貸事務所である。今回特筆すべきは「基準階有効率」（レントブル比）というものを考慮することが求められていたことだ。レントブル比とは基準階の賃貸部分の床面積を基準階の床面積で割った値で表される。つまり単純に言うともレントブル比が高ければ高いほどそのビルの収益性は高いということである。今回は 70% 以上が必要とされていた。

昨年のエスカレーターに続いて、今年の「サブライズ」は地下に設けられる機械式の駐車場であった。地上にはターンテーブルとカーリフトを設けるとされ、その寸法が図示されていたが、筆者には機械式の駐車場がよくわからなかった。機械式のタワーパーキングの図面なら練習時に描いたが、機械式の平面駐車場というものが分からずに相当困惑した。

可能な限りの想像力を働かせ、地下の駐車場を収めた。昨年とは違って、なんとか時間いっぱい描きあげることができた。しかし、学校へ戻って確認すると大きなミスに気がついた。一つの部屋のレントブル比が 70% を割っていたのだ。69.9%、単純な計算ミスだった。0.1% でも重大な違反だ。そうして筆者の 5 年間に渡る一級建築士受験はひとまず幕を下ろした。

8 建築士の資格はこれでいいのか—結びにかえて

8-1 誰のための制度か

足かけ5年間という時間と100万円を軽く超える金額を投資しても私は一級建築士の資格を得ることが出来なかった。後には腰痛とローンの返済が残された。筆者はこれで一旦資格取得を諦めた。再び学科から受験しなおす気力が残っていなかった。もちろん、大学院に入って建築の実務家から研究職を目指そうと進路変更したからという理由もある。

試験というものは結果が全てだ。どんなに努力をしても、惜しくても、結果が不合格ならば投資した時間と金は無駄になる。もちろん、(実務では全く必要とされない)手描きの図面の描き方や、座学の内容は身についたかもしれない。しかし、建築の「知」は基本的に、現場で身につける「知」なのだ。一級建築士の資格ができた当初は、建築の実務をこなしているものに対して、さほど難しくない条件で付与されていたことは冒頭で述べたとおりだ。

現在では、資格取得のプロセスが建築の実務と切り離され¹⁴⁾、多くの者は高い授業料と膨大な時間を費やし、一人前の建築士となるための通過儀礼と「割り切って」資格取得を目指す。建築設計の実務を志す者にとって、建築士資格の取得は、決して低くはないハードルとして存在している。一級建築士という巨大な資格が民間の資格学校にとっては、巨大なビジネスとなり、行政にとっては大きな「利権」となっている側面も否定できない。

8-2 天災から人災へ

1995年の阪神大震災において、多くの犠牲者

の死因が建物の倒壊による「圧死」であったことから、建築物の耐震基準が大幅に見直された。地震は、防ぎようのない天災としての側面から「防ごうと思えば防げたにもかかわらず、それをしなかったことによる人災」という側面が焦点化された。人災であれば、責任の所在を明らかにすることが求められる。行政は早速建物の耐震基準を見直し、1995年に「建築物の耐震改修の促進に関する法律¹⁵⁾」を施行させた。この法律では主に1981年以前の耐震基準によって設計されている建物対象となっている。特に学校、病院、役所などの不特定多数の人々によって利用される一定規模以上の建物を「特定建築物」とし、それらにかんしては、「建築物が現行の耐震基準と同等以上の耐震性能を確保するよう耐震診断や改修に努めること」という「努力義務」が記載されている。ここでいう人災はリスクと言い換えることもできるだろう。そのリスクを最小化するために、現代社会で重要視されているキーワードとして「警戒・用心」を挙げることができる。そのような「警戒のパラダイムが支配する社会では、災厄が顕在化してしまっただけでは遅すぎるという精神に基づいて、あらゆる危険の可能性を前もってチェックし、常にそれをモニターしつづけることでリスクに対処しようとする」(三上剛史 2010: 59)。ゆえに、建築物も巨大な地震に耐えられるかどうか「耐震診断」が行われ、不適合であれば補強が施される。そして設計に携わる建築士に対しては、「不正」をしないように監視が行われるのだ。

8-3 信頼のメディアとしての「資格」のゆらぎ

2005年に発覚したA元一級建築士による「耐震偽装事件¹⁶⁾」は一級建築士という資格に対する信頼を著しく貶めた。結果的にはA元一級建築士個人の犯罪ということで決着が付いたが、世間

14) もちろん全く関係ないわけではないが、「試験と実務は違う」という物言いは受講生、講師問わず頻繁に聞かれた。

15) 第一章、第一条には「この法律は、地震による建築物の倒壊等の被害から国民の生命、身体及び財産を保護するため、建築物の耐震改修の促進のための措置を講ずることにより建築物の地震に対する安全性の向上を図り、もって公共の福祉の確保に資することを目的とする。」と記載されている。

16) 2005年に発覚したA元一級建築士による、構造計算書の偽装事件。本来構造的な強度を満たしていないにも関わらず、設計図書を改ざんすることによって、あたかも法律を満足しているかのように見せかけていた事件。

一般の人々の間では「本当に A だけなのか」という疑念がいつまでも払しょくされないままであった。そのような「民意」の後押しもあり、行政は迅速に動いた。2006 年には改正建築基準法案を国会に提出した。それは間もなく可決され、翌 2007 年 6 月 20 日に施行された。改正内容は、一定規模以上の構造計算にピアチェック（第三者によるチェック）の義務づけや、一度提出した確認申請は誤字脱字以外の訂正そして書類差し替えを認めないなどである。しかし、審査される側の建築士はもとより、する側の審査機関にとっても「全貌が明らかにならない」状態が続き現場は大混乱した。その結果審査がストップしたり大幅に遅延したりして、住宅着工戸数は前月比 23.7% 減となり、倒産する建設関連会社が増えた。いわゆる「官製不況」である。

また建築士法も同時改正された。「耐震偽装事件」を生んだ背景には建築士の資格制度をめぐる根本的な問題があるとみなした行政は、大規模な改変に踏み切った¹⁷⁾。

その結果、建築士という専門職は国土交通省をはじめとする行政による監理・監視が徹底されることとなった。

また資格取得後のコストも無視できない。例えば平成 23 年現在、一級建築士免許を登録しようとすれば、登録免許税 60000 円と申請手数料 19200 円を支払う必要がある。さらに平成 18 年 12 月 20 日に公布された新建築士法により、3 年おきに定期講習が義務づけられたので、15750 円の受講料を支払い、5 時間の講習と 1 時間の終了考査を受ける必要がある。また建築士事務所を開設しようとすれば、管理建築士¹⁸⁾の資格を受ける必要がある。そのためには管理建築士講習を受ける必要があり、12000 円の講習料を支払い所定の講習を受けて、終了考査に合格する必要があるのだ。さらに一定以上の建物の設計には構造設計一

級建築士や設備設計一級建築士という新たに創設された資格が必要になった。

不況により仕事が激減するなか、資格や講習が「肥大化」し、それらが建築士にとって時間的にも経済的にも大変な負担になっていることを指摘しておきたい。

8-4 今後の課題

今後は、専門職と資格との関係をより広範に、そして精緻に描き出すと同時に、なぜすでに専門職に就いている者が資格の取得を一層強く求められるのか（建築士に限ると資格を取得していないと著しく仕事の範囲が狭くなる）そして、高いハードルを乗り越えて取得した資格にも常に監視の目が注がれつづけている状況について、経験的な研究と理論的な考察を加えていきたい。そこでは G. ジンメル、N. ルーマン、A. ギデンズ、U. ベックなどによって考察が重ねられてきた「信頼論」や「リスク論」あるいはギデンズのいう「専門家システム論」などを手掛かりとしたい。

おそらく建築士という資格の難易度と建築士に対する信頼度は逆相関の関係にあると思われる。建築士という専門職への信頼が揺らいでいることで、「信頼のメディア」としての資格がますます強く要請されるようになっている。かつては、一定の信頼と尊敬を集めたであろう建築士に依頼者は安心して仕事を任せ、一方の建築士の側も依頼者の負託に応えるために、専門家として最大限の努力をした。このように専門家と依頼者の間には信頼が介在した。そしてときにそれは特定の建築士に対する信仰に近いものへと変わることもあっただろう。しかし、三上剛史が「知と無知とのアンビバレンスを抱えた信頼に、半ば信仰にも似た投企に賭けるよりは、事の成り行きをしっかりとモニターし、責任ある者達を監視することの方が合理的に見えるとしても無理はない」（三上

17) それらは次のようなものである。「定期講習の義務づけ」「建築士試験の受験資格要件（学歴要件と実務経験要件）の見直し」「構造設計一級建築士・設備設計一級建築士制度の創設 一定の建築物に対する法適合チェックの義務づけ」「建築士事務所を管理する管理建築士の要件を強化」「管理建築士などによる重要事項説明の義務づけ」「再委託の制限」「建築士名簿の閲覧、顔写真入りの携帯用免許証の交付」政府広報オンラインを参照。
<http://www.gov-online.go.jp/useful/article/200809/4.html>

18) 改正建築士法（平成 20 年 11 月 28 日施行）の規定による。管理建築士になるためには、建築士として 3 年以上の設計その他国土交通省令で定める業務に従事した後、国土交通大臣の登録を受けた登録講習機関が行う「管理建築士講習」の課程を修了することが必要となる。

2008：18）と述べているように、建築士という専門家は、2006年のA建築士による「耐震偽装事件」以来完全に監視の対象となった¹⁹⁾。すでに資格を保有している者に対しては定期講習の義務付けや罰則の強化、建築設計事務所に対しては所管行政庁への定期報告の義務化という対応がなされ、これから試験を受ける者に対しては受験資格の見直しが実施された。建築士（とりわけ一級建築士）という資格が建築士という専門家の唯一の信頼のメディアとして機能しているために、あらゆる問題に対する責任が一級建築士という資格に帰せられるのだ。

ゆえに、皮肉なことではあるが、一級建築士という資格を保有していることが、むしろリスクであるということもできる²⁰⁾。経済的時間的に多大なコストを支払って取得した建築士免許が持つ責任の重さは年々増大するばかりである一方、長引く不況は、その資格の責任の重さに釣り合うだけの収入を保証してくれない²¹⁾。

このような事態は何も、本稿でとりあげた建築士にかぎったものではない。弁護士や会計士、あるいは歯科医師などの専門職も困難な状況に直面しつつある。例えば、司法試験や会計士などは苦勞して資格を取ったものの就職先を探すことが極めて難しいという事態が問題化している。

このように専門職をめぐる問題はここ数年で次々と顕在化してきている。しかしながら社会学分野で専門職の研究はほとんどなされていないのが現状である。今後は古典的なプロフェッション研究を更新し、現代の専門職の社会学という地平を切り開くための研究を重ねていきたい。

文献

- 阿部真大、2008「若者労働問題では何が問われているのか—「マニュアル」「資格」という専門性のふたつの位相」南田勝也、辻泉編『文化社会学の視座』、ミネルヴァ書房：273-285
- 本田由紀、2005『日本の〈現代〉13 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- 三上剛史、2008「信頼論の構造と変容：ジンメル、ギデンズ、ルーマン—リスクと信頼と監視—」神戸大学国際文化化学研究科紀要『国際文化研究』第31号：1-23
- 三上剛史、2010『社会の思考—リスクと監視と個人化—』学文社
- 国土交通省住宅局建築指導課 建築技術研究会編、2008『基本 建築基準関係法令集 2008年度版』建築資料研究社

19) 先述したとおり、その萌芽は1995年の阪神大震災を契機に現れたと考える。

20) 商店建築や内装をデザインするインテリアデザイナーなどは資格を持っていないゆえに、建築士法の埒外にいる。

21) この場合もちろん「個人差」が大きく関与するので一概には言えないが、人口の減少や空き家が数百万戸存在するという事実は建築士の業務にとって大きなマイナス要因である。

Problems Inherent in the Acquisition of a Professional Qualification:

The process of obtaining an Architect's license

ABSTRACT

In this paper the author describes his experience of studying and applying for an Architect's license.

Despite studying for five years from 2005 to 2009, at a specialized professional school, he was able to obtain only a Second-class Architect's license, not the First-class license he had hoped for. Obtaining First-class license is extremely difficult and very expensive but the license does not guarantee a high income for the holder. Originally, the license was the proof of an architect's professional skills.

Nowadays, it has become a necessary qualification for those who wish to exercise the profession of architect or building engineer.

Key Words: profession, license, cost of license